

退院時の妻は、また歩行器を使って歩いていましたし、会話も

こうして、夢もしなかった老々介護の日々がはじまりました。妻の健常時代の仕事が全部、一挙にわたしの肩に転化しました。家計の管理から炊事、洗濯、掃除、ゴミ出しなどの家事一切にくわえて介護の仕事です。

1カ月間の検査入院の結果、医師団は、パーキンソン病の一種で10万人に2人の割合の難病、「大脳皮質基底核変性症」の病名と、「2年後の寝たきり・認知症」を告知しました。

老々介護を生きる

わたしたちは、大学・高専の男女共学がはじまった1947年入学の同級生です。専門学科はちがいますが、学生運動の大きな流れの中で知り合い卒業後に結婚してから今年でもう64年目になります。妻・有田和子は、戦後日本ではじめての女性獣医師の資格取得者で、若い頃は、まるで「地球を蹴って歩いている」と言われたほどのいとも強豪としていました。その妻が、八十路に入ってから転倒するようになりました。2010年9月、東京病院脳内科に約

有田 光雄

I 負けてたまるか

共生の悦び 誇り高く

それから、早くも4年4カ月目の晩秋、退院当時の「要介護1」の認定が1年後の夏にはらになりました。「要介護5」といえば、「適度な介護が必要な状態・生活

がありました。「ババこめんね。きつとなおすからね」眩ぐ姿に何度戻したことでしょ。ほんとうに、無教養中の毎日でした。「田もの腫れものところきらわす、いわゆる「下の世話」で遠方にくれたこともありまし。こうした中で、一方では、あり金はたいてトイレや浴槽などの大改造をしながら、他方では、老人ホームへの「転居」を真剣に考えたのもこの時期のことでした。

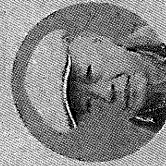
ありました。



介護4年目の老々見守り（京都府大山崎町）

の全般にわたって全般的な介護が必要（「介護保険法」）とあります。たしかに、車椅子なしには暮らせないし、お掃除も苦用です。また、たまたま笑顔も少なくなり、車椅子でも眠ることが多くなりました。とはいえ、また歩行器を使っていたころ、「生きてるうちはがんばらんとさあ」とつとめやっていたカンバリスムに、家族の団結と懸命の介護、それに、ヘルパー集団の温かい介助、この総合力の甲斐あってか、今でも寝たきりではないし、以心伝心ながらも意思疎通があるし、おつむ返しながら、「美味しいか」と聞けば、「オ、イ、イ、イ」とこたえる小さな「会話」もあります。なによりも周囲

をホトトさせる笑顔があります。たしかに、老齢のわたしにとって在宅介護の日々はしんどいです。しかし、介護には、むくいなき奉仕という一面もありますが、同時に、共生の悦びがあり、むしろ、今では介護の苦勞が生き甲斐に転化しているから不思議です。フランスのノーベル文学賞作家、ロマン・ロラン（1866～1944年）は、「生きるとはただかいてある。目に見ざる敵、目に見えない敵とのたたかいである」と言いました。いつはてるかもしれない在宅介護の日々は、文字どおり、「目に見えない敵」のたたかいそのものです。だが、「明けない夜はない」と、不屈に生きる東日本大震災・原発被災者の皆さんに思いを馳せながら、わたしたちも誇り高く不屈に生きていきます。負けてたまるかです。



ありた・みつお 1930年、島根県生まれ。50年鳥取農林専門学校卒業。51年京都府に採用され、60年代に府職員労働組合書記長など歴任。74年、立命館大学経済学部非常勤講師として公務労働論などを講義。78年府を退職。「住民自治と公務労働」、「物語 京都民主府政」など著書多数。京都府大山崎町。84歳。